

夢のあとさき その2

平成17年4月から、福島県教育委員会に勤めることになり、一家で住居を福島市に移し、10年ほどいわきから離れた。磐城高校は心の支えだった。仕事が苦しい時にもストレスに身をよじりながらも、風呂場で校歌を歌ってしのいでいた。

13年ほど磐城高校から離れたのちに、最後の勤務場所として、磐城高校に赴任することになり、懐かしい母校に戻った。様々な課題があった。なんとか過ごせたのも、いわきの人々の手助けがあったからである。最後の年になり、時代は令和と変わりゆくことになった。

令和元年10月は、いわき市の、学校がある平や好間地区が、大きな災害に見舞われた。家の天井まで水につかって、その中で何人ものお年寄りが逃げることができず命を落とした。学校の第二グラウンドは、約2万平米があり、サッカー部とラグビー部とソフトボール部が練習できる施設であるが、約2メートルの水に覆われてしまい、どこからともなく流れてきた様々なごみで覆われてしまった。

生活のための上水道が2週間ほど止まった。幸いにも、学校にひかれている上水道は、別のルートから水を運んでいて、学校生活は継続できた。

10月13日、台風が去って道が寸断されている中、本校野球部は東北大会に出発し、東北大会で結果を残した。その後、春の甲子園の21世紀枠候補となり、1月24日に甲子園への道が開いた。準優勝から50年、前回出場から25年ぶりの出場で、春夏併せて10回目の出場である。

夢は、実現することとなった。教員生活36年目の最後にして、夢の跡を見ることが出来る。なんとという幸せなのだろう。

全校生徒と甲子園で校歌を歌い、私は退職することができる。同窓生や同級生や、この学校の卒業生が、いたるところで笑顔を交わしている。この光景は、尽きることのない夢の跡先の実現である。

大學共通テストにおける英語4技能試験の活用延期や、記述問題の当分の間の取りやめなど、多くの心悩ます出来事が相次いで、福島県高等学校長協会長として対策が十分か不安で仕方がなかったが、最後の最後に、こんなことも起きるのだという気持ちである。

次なる対応は、さらなる磐城高校の活躍だが、とりあえず、何とか甲子園のアルプスに行って、生徒たちと大声で校歌を歌いたい。特に、昨年卒業した者たちや今年の卒業生たちが、胸を張って集ってこれるような大学入試の結果が待ち遠しい。

1・2年生については、次なる伝統を築くためにも、自分の目で見て自分の耳で聞いて自分の体全体で甲子園を感じてほしい。「甲子園」を感じたからこそ、分かることが山ほどあると思っている。是非に夢を成し遂げることの大切さを実感していただきたい。

さあ、みんなのでかけよう。本物の甲子園だ。